

現代中国語における「V 的 N」構文の考察

村 松 恵 子

1. 本稿の目的
2. 本稿における「V 的 N」構文
3. 「V 的 N」構文の統語的特徴
4. 「V 的 N」構文の構文的意味
 - 4.1 先行研究の捉え方
 - 4.2 本稿の捉え方
 - 4.3 「V 的 N」構文と“得”の程度補語構文
5. 「V 的 N」構文の談話上の機能的特徴
 - 5.1 「N」は談話のキーワード
 - 5.2 「V 的 N」と「V 的」の相違
6. まとめ

1. 本稿の目的

述語動詞の直後に“的”を伴う構文については、すでに多くの先行研究がある。その中で、この構文を「承前形式」と捉える杉村の一連の研究⁽¹⁾には、説得力がある。しかしそれでもなお、首肯できない点が残されている。またこの杉村の研究成果を踏まえて、小野 2001⁽²⁾は「V 的 N」構文の“的”と連体修飾の“的”の統語的意味と統語的機能は同じであり、それを「“的”のモノ化機能」と呼んでいる。さらに木村 2002⁽³⁾は杉村の一連の研究と小野 2001 を再検討し、その両者とは異なる見解を述べている。木村の見解は、「事物区分機能を担う“的”がその機能を拡張し、その結果として、「V 的 N」構文の“的”が動作区分機能を担うこととなった」とするものである。木村はさらに「……いまでは、この種の構文の意味的特徴および文法的特徴がいかなるものであるかを理解するために必要な言語事実がほぼ出揃ったと言っても過言ではない。もはや、われわれは記述の段階から説

明の段階に移っている——すなわち、この種の構文がいかなる構文的意味といかなる文法的特徴を具えているものであるかを記述する段階ではなく、なぜこの構造がそのような構文的意味と文法的特徴を具えているのかを説明する段階に移行していると言ってよい。」とも述べている。しかし、稿者は「この種の構文の意味的特徴および文法的特徴がいかなるものであるかを理解するために必要な言語事実がほぼ出揃った」との見解には同意しかねる。確かにこの言語現象は比較的詳密に記述されてはきているが、それらはこの構文の文法的特徴と意味的特徴を理解する上で説得力のある記述であるとは言いがたい。

そこで本稿は、杉村のこの一連の研究成果および小野 2001、木村 2002 を踏まえた上で、この構文の統語的特徴と構文的意味および談話上の機能を明らかにすることを目的とする。

2. 本稿における「V的N」構文

ここでは、本稿で分析の対象とする「V的N」構文を規定する。

本稿で扱う「V的N」構文とは、述語動詞（以下、Vと表記する）の直後に“的”が置かれ、さらにその直後に名詞句（以下、Nと表記する）が位置しているものに限定する。その場合、肯定文において“是”の有無は問わない。

3. 「V的N」構文の統語的特徴

中国語においては、述語動詞に後置される名詞的成分はすべて「目的語」とされており、「V的N」構文における「N」も「目的語」として扱われている。しかし、一般的にこの「目的語」とされている数量詞は、「V的N」構文においては、単独で「N」の位置に置くことができない。これについては、杉村 1982b, 杉村 1995, 小野 2001, 木村 2002 において、すでに指摘されている。しかしこの問題については、単に数量詞が「V的N」構文の「N」の位置に置かれないということだけを論じることにし然したる意味はなく、「V的N」構文の「N」の位置に置かれる名詞項の統語的特徴が、そもそもどのようなものであるかを論じる必要がある。そこで以下では、このことについて考察していく。

中国語において述語動詞に後置する目的語には、一般的に次のようなものがあるとされている。

①目的語が動作行為の対象であるもの

买书 / 写信 / 学英语 /
吃饭 / 访问你

②目的語が動作行為の移動先であるもの

去上海 / 到大阪 / 回日本

③目的語が動作行為の道具であるもの

写毛笔 / 抽咽头

④目的語が動作行為の数量を表すもの

吃两个 / 学三年 / 去五次
⑤二重目的語を取るもの
教小李日语 / 给他那本书

これらは一様に「述語動詞+目的語」と見なされているが、上記の①から⑤の例からも明らかであるように、述語動詞と、それに後置する名詞項との意味的關係は多様であり、さらに両者の意味的な結びつきの強さも一様ではない。そこで、述語動詞と、それに後置する名詞項の意味的な結びつきの強さの差異を、「反問」という方法を用いて考察してみる。

例えば下記の(1)から(7)のAの発話の場合、発話されている述語動詞（下線部）とその動作行為の主体（すべて“我”）のほかに、その状況に対する知識や場面による助けがないと想定すると、通常Bの反問が誘発される。

- (1) A: 我买了。 B: 买了什么?
 (2) A: 我吃了。 B: 吃了什么?
 (3) A: 我学了。 B: 学了什么?
 (4) A: 我写了。 B: 写了什么?
 (5) A: 我去了。 B: 去了哪儿?
 (6) A: 我给了。 B: 给了谁? / 给了什么?
 (7) A: 我教了。 B: 教了谁? / 教了什么?

上記のことが意味しているのは、(1)から(7)の述語動詞が与えられた場合、その動作行為の主体のほかに、それぞれ必ず必要とされる情報は何かということである。具体的に言えば、(1)から(4)はそれぞれの“什么”で表現されている「何を」、(5)は“哪儿”で表現されている「どこへ」、(6)と(7)は“誰”で表現されている「誰に」あるいは“什么”で表現されている「何を」が必ず必要とされる情報であるということを意味している。つまり聞き手は、これらの情報が何らかの方法で与えられて初めて、その述語動詞が表す事象を、一つの完成したものとして認識するのである。

このことを、上記の①から⑤の目的語の分類に当てはめてみると、(1)から(4)は①の「動作行為の対象であるもの」、(5)は②の「動作行為の移動先であるもの」、(6)と(7)は⑤の「二重目的語：動作行為の相手+対象」となり、これらは述語動詞と意味的な結びつきが強いということを示している。そして③の「動作行為の道具であるもの」と④の「動作行為の数量であるもの」については、①、②、⑤の目的語と比較して、述語動詞との意味的な結びつきが弱いということを示している。つまり、動作行為の主体のほかに③や④の情報が与えられても、聞き手は、その述語動詞が表す事象を、一つの完成したものとして認識することができないということである。

本稿では、述語動詞と、それに後置する名詞項の意味的な結びつきの差異から、①、②、⑤のような、その述語動詞が表す事象を、一つの完成したものとして認識するために必ず必要である目的語を「必須目的語」と呼ぶ。

そこで、「V 的 N」構文における目的語「N」の統語的特徴を見るために、述語動詞と目的語を組み合わせて、その成立・不成立をみてみると、下記ようになる。

- (8-a) 我昨天写的信。
- (8-b) *我昨天写的毛笔。
- (8-c) *那封信，我昨天写的毛笔。
- (9-a) 我去年去的北京。
- (9-b) *我去年去的五次。
- (9-c) *北京，我去年去的五次。
- (10-a) 那本书，他给的我。
- (10-b) 他昨天给的那本书。

(8)は動作行為の対象を「必須目的語」とする述語動詞“写”の例である。この場合、Nが対象目的語＝“信”である(8-a)の場合には成立するが、(8-b)と(8-c)の道具目的語＝“毛笔”の場合には成立しない。(9)は動作行為の移動先を「必須目的語」とする述語動詞“去”の例で

ある。この場合にはNが移動先である“北京”の場合には、(9-a)のように成立するが、Nが(9-b)と(9-c)のように、動作行為の回数を表す場合には成立しない。また(10)は二重目的語(動作行為の相手+対象)を「必須目的語」とする述語動詞“给”の例である。この場合には(10-a)と(10-b)から明らかであるように、Nが(10-a)のように動作行為の相手の場合にも、(10-b)のように対象の場合にも成立する。

以上のことから、「V 的 N」構文における目的語「N」は「必須目的語」に限られることがわかる。

先行研究においては、Nの統語的特徴は個別の言語表現について述べられてきてはいるが、それらを統括的に捉えたものはなく、上記の杉村、小野、木村についても例外ではない。「V 的 N」構文における目的語「N」は「必須目的語」に限られるということは、「V 的 N」構文を考察する場合の大前提とされなければならない。

次に、「V 的 N」構文の構文的意味について考察していく。

4. 「V 的 N」構文の構文的意味

ここではまず、杉村 1995 と木村 2002 で述べられている「V 的 N」構文の構文的意味を検討し、次に本稿の分析に入る。

4.1 先行研究の捉え方

「V 的 N」構文の構文的意味について、杉村 1995 と木村 2002 は、下記のように述べている。

杉村 1995: 先行文脈あるいは発話環境においてある事件の発生が報告・確認された後、その事件にかかわるさまざまな関係者や状況を指定確認・補足紹介するため、再度その事件に言及するときに採用される形式、それが「……的」で

ある。

木村 2002: 既に実現したことが前提とされている特定の動作行為に対して、その動作行為に関与する何らかの関与項を基準に区分的限定を加え、当該動作（行為）の属性を措定しようとするものである。ここでいう「関与項」とは、具体的には、動作者、受動者、地点、時点、道具、手段、受給者、共同者等等を指す。“的”構文とは、一言で言えば、既存の動作行為に対して区分的な属性措定を行うための構文である。

本稿は、上記の杉村と木村の見解に対して、反論する立場をとるものではない。基本的には同方向の立場であり、この両者の見解を踏まえた上で、「V 的 N」構文の構文的意味を、より一層明確化するために、以下で考察を進めていく。

杉村のこの構文に対する見解には曖昧さが残る。例えば「ある事件の発生が報告・確認された後」とあるが、この説明は抽象的である。また、「その事件にかかわるさまざまな関与者や状況」という説明も、いま一つ明確さを欠く。

杉村は「V 的 N」構文を、その一連の研究において「承前形式」と捉えている。これに対して木村 2002 は、次の(i)から(iii)を理由に、杉村のこの捉え方に反論している。

- (i) 「V 的 N」構文の「N」の位置に数量表現が置かれない。
- (ii) 「V 的 N」構文は様態表現と共起しない。
- (iii) 「V 的 N」構文は原因表現と共起しない。

この3点に対する木村の見解を検討してみることにする。

まず、「V 的 N」の「N」の位置には単独で数量詞が置かれないことについては、2.2 で述べた通りである。このことについて木村は、「数量とは本来「その事物」自身が内包する属性ではあり得ず、区分限定の基準にはなり得ない」としている。この見解には妥当性があり、数量

詞が本稿でいう「必須目的語」となり得ない理由もここにある。つまり動作行為の量を表す数量表現は、その動作行為が内包する属性ではないことによって、単独では「V 的 N」の「N」の位置には置かれないのであり、「動作行為が内包している属性」とは、すなわち本稿の言う「必須目的語」なのである。

数量表現が「N」の位置に置かれないもう一つの理由として、木村は次のように言及している。

「“的”構文において数量表現が焦点対象になり得ないもう一つの理由としては、動作行為を区分限定するための基準には、〈人〉、〈もの〉、〈地点〉、〈時点〉など離散的な関与項がふさわしく、〈量〉という非離散的な概念はそれにはふさわしくないということが考えられる。区分基準に適する項目というのは、〈我、你、他、小王、老李……〉や〈东单、西单、王府井、白石桥……〉のように、各メンバーが対比項として互いに対立しつつ一つの範疇を構成しているというような、離散的な成員であることが望ましく、離散的であってこそ対立的であり、対立的であってこそ区分性をもち得る。“三本”か“五本”か、“三个小时”か“五个小时”かの差は質的な連続体における多寡の差であって離散的な項目間の対立とは認識されにくい。動作区分の基準に適するのはやはり〈人〉、〈もの〉、〈地点〉、〈時点〉など離散的な対立を喚起しやすい表現——すなわち典型的には名詞表現——から構成される関与項である。」

また木村は、「V 的 N」構文が様態表現、原因表現と共起しにくい点についても、それらが離散的で対立的な項目を喚起しにくいことが理由であるとして、「様態表現が典型的には形容詞成分から構成され、原因表現が典型的には述語成分や節から構成されるという事実からも明らかのように、それらの表現はいずれも〈モノ = entity〉的ではなく、〈コト = event〉的であり、

離散性を欠く。従って動作行為の区分基準には適さない。」と述べている。

つまり木村は、「V 的 N」構文が、(i)「N」の位置に数量表現が置かれられない理由、(ii)様態表現と共起しない理由、(iii)原因表現と共起しない理由について、すべて、それらが「離散性を欠く」ことを、その理由として挙げている。しかしこれは些か説得力に欠ける。

この中で木村は、「離散的なもの」として、具体的に〈我、你、他、小王、老李……〉や〈东单、西单、王府井、白石桥……〉を例として挙げている。これらは個別的、具象的のものであり、それは客観的事実項目である。客観的事実項目とは、話し手が誰であるかに関わらず、変わることのない普遍的事実項目である。木村が「離散的なもの」として、具体的に例として挙げているものは、まさに客観的事実項目である。そして「離散性を欠くもの」を「非離散的」とするならば、それは個別的でなく、具象的でなく、客観的でないもの、ということになる。個別的でなく、具象的でなく、客観的でない、とは、換言すれば、抽象的で、主観的である、ということである。しかし、木村が「非離散的なもの」としてここで挙げているのは、(i)数量表現、(ii)様態表現、(iii)原因表現である。確かに(ii)の「様態表現は」は話し手の主観的な判断である。しかし、(i)の数量表現について、木村は「質量的な連続体における多寡の差」であるとしているが、これは動作行為の数量であって、決して抽象的ではなく、主観的なものではない。また(iii)の「原因表現」は「離散的、非離散的」の範疇の枠外にあるものであり、それは個別的、具象的、客観的という概念にも、抽象的、主観的という概念にもなじまないものである。

このように、木村が「非離散的」としている(i)、(ii)、(iii)は、それぞれ個別の言語表現において、統語的にも構文的意味の上からも異なる機能を有するものであり、本来これらを一つの概

念で括ろうとすることには無理がある。

以下では、両者の見解を踏まえて、「V 的 N」構文の構文的意味をより明確化するための考察を進めていく。

4.2 本稿の捉え方

「V 的 N」構文は、述語動詞(V)を中心とし、それにその他の成分が添加して構成されている構文である。従って、この構文は述語動詞を中心に考察していく必要がある。

先の2.2でみたように、ある述語動詞が表す事象を一つの完成したものとして認識するためには、必ず必要な項目があった。それはすなわち動作行為の主体と、2.2でみた「必須目的語」である。本稿ではこれをその述語動詞の「必須項目」と呼ぶ。そしてこれ以後、「述語動詞+必須項目」を「事」と呼ぶことにする。

そもそも個別の言語表現は、その情報伝達の中身のみをみると、客観的事実項目と、それに関わる話し手の主観的項目から構成されている。このことを述語動詞を核としてみても、個別の言語表現は、「述語動詞+必須項目」=「事」を中心として、それを個別化し、特定化するために必要な客観的事実項目と、それらに対する話し手の主観的評価項目を添加して構成されている。以上のことを、例えば下記の(1)「彼は昨年、うれしそうに船で上海へ行った。」について、具体的にみていくことにする。

(1)を構成している表現項目は以下の通りである。

- (ア) 行為の主体 = 「彼」
- (イ) 時 = 「昨年」,
- (ウ) 行為の様態 = 「うれしそう」,
- (エ) 手段 = 「船」,
- (オ) 行き先(場所) = 「上海」,
- (カ) 述語動詞 = 「行く」

このうち(ア)の「彼」は、述語動詞の行為の主体であり、(オ)の「上海」はその必須目的語であ

る。つまりこの2つの項目は述語動詞「行く」を一つの完成したものとして認識するために必要な必須項目である。そして(イ)の時 = 「昨年」、(エ)の手段 = 「船」は、「彼が上海へ行く」という「事」の生起を個別の特定の「事」として限定する客観的事実項目である。先にも述べた通り、客観的事実項目とは、話し手が誰であるかに関わらず、その情報内容が変わることのない、検証が可能な普遍の事実である。しかし、(ウ)の行為の様態を表す「うれしそう」は客観的事実項目ではなく、話し手の主観的評価項目である。主観的評価項目とは、話し手が誰であるかによって、その表現内容を異にするものであり、(11)においても、この「事」を「うれしそう」と捉えるか、「楽しそう」と捉えるかは、話し手の主観による。

これらを図式化したのが下記の《図I》である。

これを「V的N」構文に当てはめてみると、「V的N」構文によって表現される項目は、「V」の必須項目と、客観的事実項目であることがわかる。

また、杉村と木村は、「V的N」構文の「N」に疑問詞を置くことができるということについて、明確な解答を与えていない。このことについて、木村2002が取り上げている下記の(12)をみてみよう。

(12) 甲：你都要的什么菜？

乙：我要的奶油菜心和香酥鸡。

(12)の甲の発話が成立するのは、何も不思議なことではない。甲の発話がなされる前には、甲

と乙の間で「事」、つまり「述語動詞（“要”）＋必須項目（動作行為の主体＝乙と必須目的語＝“菜”）」＝「乙が何か料理を要求した」という理解が必ずある。

その了解の後、「事」を個別化し特定化するために発話されているのが(12)の甲である。

また、客観的事実項目とは、具体的に言えば、木村2002において挙げられている「動作者、受動者、地点、時点、道具、手段、受給者、共同者等等」である。これらは「事」の生起を個別の特定の「事」として限定するための客観的事実項目である。

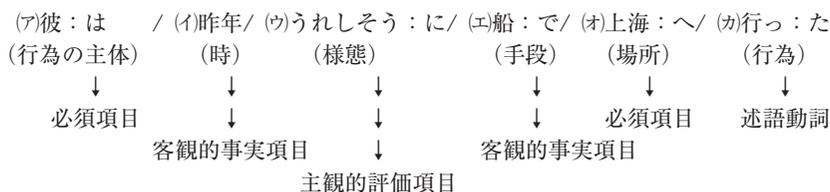
これらのことから、2.2.1で示した(i)「V的N」構文の「N」の位置に数量表現が単独で置かれる理由、(ii)「V的N」構文は様態表現と共起しない理由、(iii)「V的N」構文は原因表現と共起しない理由、については、それぞれ、以下のように述べることができる。

(i) 数量表現が単独では「V的N」の「N」の位置に置かれるのは、2.2でみたように、数量詞が必須目的語でないからであり、また数量詞は客観的事実項目ではあるが、「事」の生起にかかわりをもたないからである。

(ii) 様態表現が「V的N」構文と共起しないのは、それが話し手の主観的評価項目であるからである。

(iii) 原因・理由表現が「V的N」構文と共起しないのは、原因や理由が「事」の生起を個別化、特定化せず、「事」に関わる客観的事実項目や、話し手の主観的項目を超えた外枠の表現範疇に存在しているものであるからである。

《図I》



以上のことは下記の《図Ⅱ》のように図式化することができる。

そして、杉村 1995 のこの構文に対する見解を、さらに明確化するならば、「ある事件の発生が報告・確認された後」とは、「述語動詞+(a)必須項目」=「事」の生起が話し手と聞き手の間で了解済みになった後、ということであり、「その事件にかかわるさまざまな関与者や状況」というのは、「事」の生起を個別化し特定化するための客観的事実項目(b)である、ということになる。

これらのことをまとめると、「V的N」構文とは、話し手と聞き手の間で、すでにその生起が確認されている「述語動詞+(a)必須項目」=「事」について、その生起を個別の特定の「事」として限定するための客観的事実項目を表現する構文である、とすることができる。

4.3 「V的N」構文と“得”の程度補語構文

杉村はその一連の研究の中で、“得”の程度補語構文も、「V的N」構文と同様に「承前形式」と捉えている。本稿も、“得”の程度補語構文を「承前形式」と捉えることに異論はない。そこで、「V的N」構文の構文的意味をさらに明確にするために、“得”の程度補語構文と比較してみることにする。

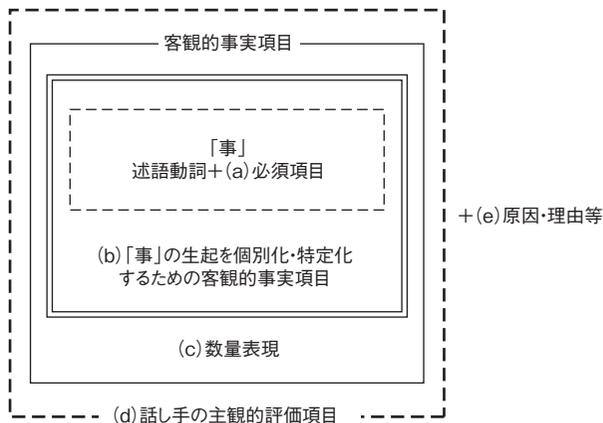
杉村 1995 は“得”の程度補語構文を「動作・行為の発生に伴って生じる結果的な程度、あるいは属性・状態が到達した程度が観察されたとき、それらを導くものとして採用される形式」と定義している。「動作・行為の発生に伴って生じる」とは、「述語動詞+必須項目(a)」=「事」の生起に伴って生じる」ということである。そしてその「結果的な程度、あるいは属性・状態が達した程度が観察された」結果の表現内容とは、話し手の主観以外の何者でもなく、2.3.2の《図Ⅱ》における(d)のことである。つまり、“得”の程度補語構文は、「述語動詞+必須項目」=「事」の生起が話し手と聞き手の間で了解済みになった後に、それに対する話し手の主観的評価項目を述べる文法形式であり、この意味において「V的N」構文の構文的意味とは対照的な構文であると言うことができよう。

5. 「V的N」構文の談話上の機能的特徴

「V的N」構文の談話上の機能については、すでに杉村が「承前形式」であることを指摘している。ここでは、それ以外の談話上の機能的特徴について、考察していく。

考察を進めるにあたっては、日本に留学中の

《図Ⅱ》



中国語話者2名による自然発話を言語資料として分析を進めていく。

5.1 「N」は談話のキーワード

下記の(13)では、Aが卒業した中国の大学の魏先生について、談話が展開されている。この先生は非常に日本語の運用に堪能である。

(13)

A-1: 话又说回来, 你要说, 在国内学日语学不成吧。学不好吧, 也不见得。就是我们学校的那魏老师, 她是从来没出过。就是学成之前吧, 从来没出过国, 没到日本来过。她说得特别好。后来, 她第一次到日本来, 人家特别惊奇。人家问说, “你在哪儿学的日语?”

B-1: 她说什么呀?

A-2: 她说“我是在国内学的。”人家以为她是在日本哪个大学毕业的。

B-2: 嗯。但是, 她在国内肯定经常和日本人接触吧?

A-3: 不知道。不过, 好像她当过周总理的翻译。而且她现在有一个资格, 就是说, 她在新华社给人家审稿那个, 就是日语, 她写的稿子, 不用让人家审查。就是说, 她已经达到这种水平了。

A-1の下線部に「V的N」構文が発話されており、「N」は“日语”である。ここで「V的N」構文が発話されるまで、この談話は、魏先生の日本語運用能力のすばらしさについて語っている。A-1の下線部の「V的N」構文が疑問文であるため、A-2ではまずその問いに対する答えが発話されている。しかし、さらに続けてA-3の発話をみていくと、そこではまた魏先生の「日本語」のすばらしさについて談話が展開されており、「V的N」構文によって情報提供された客観的事実である日本語を学んだ「場所」については、全く関心が及んでいない。つまりこの

談話においては、魏先生が日本語を学んだ場所が談話のキーワードにはなっておらず、あくまで「N」の“日语”がキーワードである。そしてまた、話し手がここで「V的N」構文を用いたことによって、その談話が「V的N」構文発話後も、“日语”をキーワードとして、談話が展開されていくことを示していることがわかる。

もう一つ、下記の例(14)をみる。

(14)は、日本に留学中の中国語話者(CとD)が、Dの結婚について交わした対話である。

(14)

C-1: 你们谈恋爱谈了几年?

D-1: 大学二年级开始吧, 到现在大概十年了。

C-2: 到结婚为止。

D-2: 大学二年级谈恋爱。大学毕业一年以后, 四年以后结婚的。结婚到现在已经第五年了。就是加上谈恋爱, 加上大学在一起认识, 加上, 哦, 九年半了吧, 不到十年。

ここではD-2において「V的N」構文が表現されている。そして「V的N」構文の発話の後の談話の展開をみていくと、「V的N」構文によって情報提供されている客観的事実である結婚した時期、つまり恋愛が始まってから4年後であるということについては、語られておらず、「N」の“结婚”について談話が展開していく。ここで「V的N」構文を用いることによって、“结婚”がこの談話のキーワードであることを示しており、またこの談話が「V的N」構文発話後も、“结婚”をキーワードとして、談話が展開されていくことを示していることがわかる。

次に、以上で述べた「V的N」構文の談話上の機能的特徴を明確にするために、必須目的語の欠落している「V的」表現と比較して検討していく。

5.2 「V的N」と「V的」の相違

下記の(15)の談話は、日本に留学中の中国語話

者（EとF）が交わした対話である。

(15)

E-1：有好多东西好像，来到日本，就象进到另外一个世界似的。

F-1：是，好多东西是。

E-2：你说，就是中国，你说，咱们仨来，你说，你从北京，小陈是从广州过来的，我从东北来的。所以在国内本来那生活环境就不一样。来到这儿呢，差距就更大了。语言也不一样，挺好玩的。

“你”と“小陈”と“我”がそれぞれ「北京から」，「広州から」，「東北から」留学してやって来た先は「日本」である。しかしE-2の下線部の発話の「V的」の後ろに「日本」は表現されていない。この談話では，留学先の「日本」に関心は向けられておらず，その関心の中心は，中国国内での生活環境がそれぞれ異なる北京，広州，東北という地域である，その異なる地域からやって来たことが話題の中心である。従って「V的N」構文の「N」にあたる「日本」は，ここでは表現されていない。

もう一つ，下記の例(16)をみてみる。

(16)は，日本に留学中の中国語話者（GとH）が，中国語を勉強している84歳の日本人女性について交わした対話である。会話の中の“她”は，この84歳の女性のことである。

(16)

G-1：她也挺有水平的。她吧，不是到中国去，满洲的时候教过日语嘛。教了十年。然后呢，回到日本，没有结婚。……

H-1：她说现在她还订人民日报呢。我特别惊讶。

G-2：她说了，她订人民日报。不是海外版，是国内的。

H-2：噢，就是国内的那种报纸啊。哎哟，真可以呀。

G-3：……然后她，那个人我挺佩服她的。

H-3：对，我觉得我也挺佩服她的。

G-4：看起来哈，但是中文说得挺好，她学了十几年了吧。

H-4：而且我觉得她自己啊，没有一种，怎么说呢，老想是，好像有点儿追求感似的哈。好像没有一种，没有觉着老了，算了吧。

G-5：就是啊，有这种追求。

H-5：就是吗。所以真是了不得这人。

G-6：然后说：而且就是北京大学有老师，是她以前在满洲的时候教过的学生。北大，复旦，什么的，上海也有很多，北京也有很多那样的。

H-6：是吗？

G-7：嗯。后来，把地址留给我，说让我给她写信，她用中文写的。

H-7：哟，真不错。

G-8：挺好的一个老太太。觉得跟她聊天的话呢，就是精神上哈，可以有很多……

H-8：好像还有一种学习那种感觉似的哈。确实是等到我老的时候，会不会象人家这样，那就知道了哈。

G-9：我觉得不会。你看她一个人，一个人吧，一点也不那种。

H-10：没有寂寞那感觉哈。

G-10：嗯，哎呀，怎么办？现在我想她，我就觉着自己有时候，老泄气哈。觉得当一天和尚撞一天钟，那种感觉。

H-11：哎呀，那个人，确实是。

G-12：特逗。上课的时候……

HとGは，この84歳の日本人女性を非常に尊敬している。この女性は，満州時代に中国で日本語を教えた経験をもっており，その当時の教え子が，現在では北京大学や復旦大学などの教員となっている。また現在，この女性は「人民日報」の国内版を定期購読するなどして，熱心に中国語を学習している。このような内容が，G-1・H-1からG-6・H-6で話されている。そしてその次のG-7において「V的」が表現さ

れており、それは「彼女が現在では北京大学や復旦大学などの教員となっている教え子達に、中国語で手紙を書いた」という内容である。しかしここでは「N」にあたる“信”（手紙）は表現されていない。さらに続けてこの談話の展開をみていくと、G-8から以後、“信”（手紙）については全く関心が及んでいないことがわかる。つまり、G-7の関心事は、その手紙を「中国語で」書いたことであり、“信”（手紙）は話題の中心ではない。従って、ここでは「N」にあたる“信”（手紙）は表現されていない。

以上、「V的N」構文において、「N」が表現されている場合と、表現されていない場合について、両者が実際に用いられている談話の表現例を分析することによって考察した。その結果わかることは、「V的」表現は決して「V的N」の「N」が省略されたものではなく、談話上、両者は明確に使い分けられているということである。「V的N」と表現された場合、「N」はその談話におけるキーワードであり、「V的N」構文が表現された後も、「N」を話題とした談話が展開されていく。一方、「V的」と表現された場合には、この表現によって情報提供された客観的事実項目がその話題の中心となっている、ということである。

6. まとめ

以上、「V的N」構文の統語的特徴と構文的意味および談話上の機能について分析してきた。それは、以下のようにまとめることができる。

1. 「V的N」構文の統語的特徴：「V的N」構文の「N」は「必須目的語」である。
2. 「V的N」構文の構文的意味：話し手と聞き手の間で、すでにその生起が了解済みであ

る「事（＝述語動詞＋必須項目）」を個別化し特定化するための客観的事実項目を表現する構文である。すなわち「客観的事実叙述構文」。

（“得”の程度補語構文の構文的意味：話し手と聞き手の間で、すでにその生起が了解済みである「事（＝述語動詞＋必須項目）」に対する話し手の主観的評価を表現する構文である。すなわち「主観的評価叙述構文」。）

- (3) 「V的N」構文の談話上の機能的特徴：「N」はその談話におけるキーワードであり、その談話における話し手の関心は「N」にある。一方「V的」で表現された場合には、その談話において、話し手の関心は「N」には向けられていない。したがって、「V的N」と「V的」を用いた場合とでは、両者の談話の展開は異なり、両者には明確な使い分けが存在する。

注

- (1) 杉村博文 1982a 「「是……的」——中国語の「のだ」の文」, 『講座日本語学12 外国語との対照』明治書院
杉村博文 1982b 「中国語における動詞の承前形式」, 『日本語と中国語の対照研究6』大阪外国語大学中国語研究室日中語対照研究会
杉村博文 1983 「‘的’前移せよ」, 『中国語学・文学論集』東方書店
杉村博文 1995 「中国語における動詞・形容詞の承前形式」, 『語学研究大会論集3』大東文化大学語学教育研究所
杉村博文 1999 「“的”字构造. 承指与分类」, 『汉语现状与历史的研究』中国社会科学出版社
- (2) 小野秀樹 2001 「“的”の「モノ化」機能——「照応」と“是……的”文をめぐって」, 『現代中国語研究3』朋友書店
- (3) 木村英樹 2002 「“的”の機能拡張——事物限定から動作限定へ」, 『現代中国語研究4』朋友書店